

のために死亡した1例について報告した。51歳男性、初発症状は原発巣不明の転移性脳腫瘍による右片麻痺であったが、次第に肺転移による呼吸困難も増強、結局右癌性胸膜炎のため高度の胸壁緊張を来し、発症後2カ月半で死亡した。剖検所見では両腎共に続発性多のう胞腎の状態であり、左腎下極には $5 \times 4.5 \times 4.5$ cmの腎細胞癌が見られ、これが原発巣であった。

54. 全幹迷切術——内外分泌面よりの考察——

大坪雄三（大坪胃腸外科医院）

私は胃潰瘍（GU）に対しては胃切を、十二指腸潰瘍（DU）に対しては原則として広田式全幹迷切術を施行。今回 GU 125 例、DU 230 例ならびに術後患者 85 例の胃液分泌と、一部に血中ガストリン（G）の測定を行ない、術後3週より6年にわたって内外分泌面よりの追跡を行なった。インシュリン法（I）及びペンタガストリン法（P）とも、DU が GU より高く、G は DU 53.7 pq/ml、GU 82.0 pq/ml であった。TV 前及び3週後では MAC、MAO、PAO ともに低下。G は 53.7pq/ml → 68.2 pq/ml と術後に増加。3週以降6年までの調査では、I で BAO 7.5 mEq/h → 2.5 mEq/h、MAO 7.5 mEq/h → 6.0 mEq/h、PAO 13 mEq/h → 10.5 mEq/h と低下。P でも同様の傾向を示した。術後合併症として、排泄障害、嚥下障害が目立つが、ダンピングは2%弱であった。迷切施行上の問題点として、迷走神経ならびに交感神経が視床下部を介して回路を形成していることを重視し、この回路を如何に必要最小限の範囲で遮断するかが問題であると思われる。

55. 全身用 CT（東芝 CT-80 A 型）の使用経験

新井洋太郎（新井病院）

最近10カ月間に経験した症例は2756例であります。頭部46%、肝胆膵は36%であります。比の中より症例8例に就き発表させて載きます。最もよく使用されるのは、頭部であり、外傷、脳出血、脳梗塞症、腫瘍等の診断は大変容易となりました。消化器では肝癌、胆石症、膵癌等を利用して居りますが大変便利な器械と考えて居ります。

56. 肝 low density area に対する CT 値測定の意義

大西盛光、関 幸雄、中村 宏、丸山達興、
武藤護彦（川鉄）

われわれは、川鉄病院において、Somatom 2 を用いて、肝 low density area の CT 値測定を行い、それ

が、肝病変部の質的評価を可能にし、CT 読影診断上の補足的情報として、極めて有意義なものであることを確認した。

57. 下肢静脈瘤ストリッピングの改良手術法

高瀬晴夫（高瀬医院）

伏在静脈末梢部より先端の彎曲して居る MPA 型静脈撮影用カテーテル T 7、長さ約 100cm を挿入、X線テレビ透視下で76%ウログラフィン20ml ⊕リンゲル 20 ml 稀釈造影剤を注入、注射器を長軸方向に廻転させつつ、カテーテル先端の方向を変え、静脈内を上行させ、カテーテルの下端を切断してストリッパー先端を直接接合させ、カテーテルの誘導によりストリッパーを静脈内全長に挿入させ、下方抜去のストリッピング手術を容易にさせ得る事を報告した。

58. 北里大学における腎移植の現況（VIII）

渡部浩二、柏木 登（北里大）

移植腎の予後を左右する前感作抗体について自験例85例の分析より、その特異性や recipient の DR タイプが抗体産生に与える効果を検索し、これら前感作抗体は recipient の DR タイプと関連し、DR 2 をもつ recipient は low responder、DR 1 は、high responder に属した。またこれら low responder group (DRw 8, w 6, 2) は成績も良く、high responder group (PRI) では悪いことが判明した。

59. 膵胆管合流異常モデルにおける胆道内膵酵素活性化動態

大川治夫、澤口重徳、坂庭 操
（筑波大・小児外科）
石川詔雄（同・外科）

犬を用いた実験モデルを背側膵管、総肝管の吻合により作成する方法を開発した。新生犬16頭を含む65頭の1～24カ月の経過を観察した。人と同様の諸病変をみとめたが、その原因として、胆汁内で膵蛋白分解酵素が活性化している事実を発見した。その動態及び活性化の原因を追求している。

60. 立体映像に必要な新しい撮影装置の開発

植松貞夫、宇野公一（千大・放射線部）

X線診断学の分野に三次元映像影を応用できれば非常に有意義である。三次元映像影を確立するためには三次元映像に必要な撮影装置、撮影装置から得られた資料を